



寺口麻穂
**ドギー
パラダイス!**
犬と人間の快適な生活
第23回

犬の映画・犬の本

在米22年。かつては人間の専門家を目指し文化人類学を専攻。2001年からキャリアを変え、子供の頃からの夢であった「犬の専門家」に転身。地元のアニマル・シェルターでアダプション・カウンセラーやトレーナーに関わり、個人ではDoggie Project (www.doggieproject.com) というビジネスを設立。犬のトレーニングや問題行動解決サービスを提供している。愛犬ジュリエットが他界した今は、ニューヨークに移転して活躍中。
ご意見・ご感想は：info@doggieproject.com



てらぐちまほ

巷にはとにかくたくさん「犬を描いた実話や物語の映画や本が溢れていますよね。きっとこのコラムを読んでくださっている犬好きのみならずその多くを閲覧になったり、読まれたりしているのではないのでしょうか。それならどんな映画をご紹介しますか……。かの有名なラッシー？ それともヘンジー？ わりと最近のものなら『My Dog Skip (2000)』がいいか……と思いつめぐらしていた時に、随分前に見た映画ですが、皮肉なところも交えてかなり笑えるし、犬好きには「分かる、分かる」という部分もたつぷりのコメディ映画を思い出したので、それをご紹介します。本の紹介には、ずっと気になっていたけどなかなか手に取れなかった一冊を。読んでびっくり！ 素晴らしい本と出会えたと実感できた一冊があったので、それをこの場で紹介させていただきます。

【Best in Show】 (邦題「ドッグ・シヨウ」) 2000年全米公開

Best in Showは、世界的に有名なウエストミンスター・ケネル・クラブ (Westminster Kennel Club) が主催する品評会の優勝者として、このドッグ・シヨウは毎年一度、ニューヨークのマジソ

ン・スクエア・ガーデンで行われます。今年で135周年を迎えたということですから、かなりの歴史を持った由緒正しい大会。この映画は、そのドッグ・シヨウをパロディー化し、メイフラワー・ドッグ・シヨウという名前前でフィラデルフィアを舞台に、そこに出場する半ばクレージーな飼い主たちやハンドラー、そして参加犬たちを面白おかしく描いています。純粋な犬の映画というよりは、超個性的な飼い主のシヨウにかけられる気込みや、珍行動に焦点が当てられていて、その滑稽さが本当に笑えます。大いに笑ってざらつと楽しめる犬の映画。ぜひ一度見てみてください。

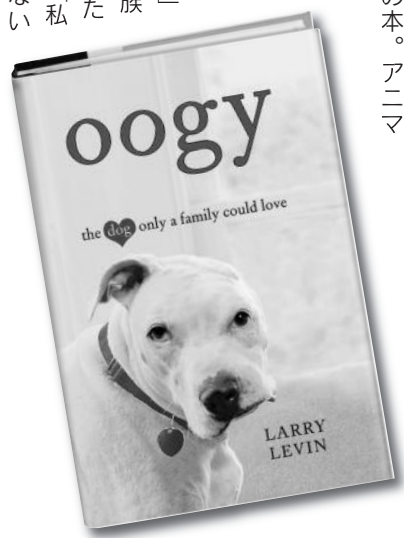
【Oogy】 ウーギー 2010年出版(未翻訳)

顔の左半分を失ったマシユマロのように真っ白な犬のアップの写真で飾られた表紙の本。アニメ

連の仕事に携わる人の間で大きく話題になっていたし、TVの「オプラ・ウィンフリー・シヨウ」にも飼い主である家族と一緒に登場していたのをたまたま見て、「私も読まなきゃいけない

なあ」と思いつつ、なかなか手に取れませんでした。動物虐待関連では、人よりはかなりの「すごいこと」を実際に見たり、体験したりしている私でも、読んでつらくなるに違いないと億劫がっていたのです。しかしある日勇気を出して読み始めたところ、2日で完読。迷っていた自分が恥ずかしくなるほど、心の底から温かくなる素晴らしい一冊でした。出会えたことに感謝の気持ちでいっぱいになり、本を閉じた瞬間しばらくほろっとしてしまつたくらいです。半死状態になるまで虐待された子犬ウーギー(ピットブル)と思込まれていたが、実はドゴ・アルゼンティノという犬種)と運命的に出会ったペンシルバニアの家族の実話なのですが、動物虐待がテーマではなく、まさに家族愛とは、父親とは……ということをお父さん(著者)の視点から本当に美しく語ってくれるお話。お父さんと双子の少年たちの間の愛、そしてお父さんとウーギーの間の信頼。お父さんとウーギーを含めた「3人の息子」のつながり。真実の愛と絆を教えてくれる心温まる一冊です。是非読んでください。

さて、今回は私たち人間がよく陥る「犬の擬人化」についてお話したいと思っています。犬は人間ではない。当たり前のことなのに、私たち人間は、犬を人間化して考えてしまうことが多いです。そこから生まれる誤解。ありがちな擬人化とその真相について考えてみたいと思いますので、どうぞお楽しみに。



感動の実話をつづって話題の「Oogy」